

郷土博物館・文学館だより



現在、当館では12月21日（日）まで特別展「『春の小川』の流れた街・渋谷一川が映し出す地域史一」を開催しています。

大正時代 「春の小川」（河骨川）
（神山幸男氏所蔵）

特別展

「『春の小川』の流れた街・渋谷

一川が映し出す地域史一」開催される

唱歌「春の小川」の舞台となった渋谷は、明治ごろまではのどかな風景が広がり、歌詞にもみられるような小川がいたるところに流れていましたが、街の発展とともにその面影は失われてゆきました。今回の特別展では、かつての川の姿と、川と渋谷の人々とのさまざまな関わり方を紹介することにより、渋谷の地域的特性を探っていきます。会場では来館された皆さんが、渋谷川の源流が描かれた高遠藩内藤家の屋敷図や玉川家屏風などの展示品を熱心にご覧になっています。



展示室風景

渋谷にいまも残る古墳・猿楽塚

東急東横線の代官山の駅から鎗ヶ崎の交差点を経て、旧山手通りを南平台方向へ歩いていくと、道の両側にヒルサイドテラスの建物が見えてきます。ヒルサイドテラスは横文彦氏が設計したもので、「代官山」ファッションの発信地の一つになっています。

このヒルサイドテラスの一角、旧山手通りを南平台方面に向かって左側に、こんもりとした小山があるのをご存知でしょうか。それが猿楽塚です。

猿楽塚は、いまから約1,500年ぐらい前につくられた古墳と想定されています。この付近には、言い伝えによれば昔は数基の古墳があったようですが、現在は二基が残っているのみです。一基は旧山手通りに近い「北塚」、もう一基はそこから少し奥に入った場所にある「南塚」です。二つの古墳はともに円墳で、北塚は基底部の径が約20m、高さは約5mに達します。これらの古墳はまだ発掘調査がされていないので、詳しいことはよくわかっていません。ただ古墳のある場所は渋谷川と目黒川にはさまれた西渋谷台地上に位置しますので、おそらくその頃、この付近を治めていた人のお墓ではないかと考えられています。

さて、この猿楽塚ですが、実は江戸時代からよく知られた場所でした。江戸時代にも、いまと同じように地域の観光スポットを紹介したガイドブックのようなものがありました。その代表的なものが『江戸名所図会』です。その中で猿楽塚のことがふれられています。ただし、猿楽塚の表記は違って「去我苦塚」となっ

ています。どうしてなのでしょう。名所図会では、「昔、このあたりに住んでいた人たちが、この場所でお酒を飲んだり、歌ったり、踊ったりして、苦を去った（やわらげた・解消した）」と、「去我苦塚」について説明しています。このほかにも『新編武蔵風土記稿』などでは、「この付近の人がいうには、昔、かの源頼朝がこの地に来て猿楽を催し、それに使った道具をこの場所に埋めた印である、としているが疑わしい……」ともいっています。

このように「さるがく」の由来については諸説あるようですが、「去我苦」のために、江戸時代の人たちは、一度ではなく、何度もこの場所を訪れたのでしょうか。現在の代官山は、ファッションを中心に日々多くの人びとが訪れる場所になりました。買い物やウインドショッピングの合間に、是非、猿楽塚にお立ち寄りください。ひょっとしたら、「苦」が飛んでいってしまうかもしれません。



ヒルサイドテラス内にある猿楽塚（北塚）



「夕焼小焼」の作曲者・草川信

「夕焼小焼」(中村雨紅作詞)で有名な作曲家・草川信は、「揺籃のうた」(北原白秋作詞)「どこかで春が」(百田宗治作詞)「汽車ポッポ」(富原薫作詞)など、数々の秀歌を残し、これらは現在でも多くの日本人に愛唱されています。

バイオリン奏者でもあった草川の紡ぎだすメロディには、独特の情感があると言われています。

草川は、大正期に最盛期を迎える「童謡運動」の担い手でした。そのきっかけとなったのは、雑誌『少女号』に掲載された清水かつらの詩に対する作曲でしたが、活動が本格化するのは、大正10年(1921)、東京音楽学校の同級生で、留学する成田為三に代わって、弘田竜太郎とともに『赤い鳥』に登場して以後のことでした。『赤い鳥』のほかにも、『童話』や『チチノキ』などの児童雑誌にも曲を寄せています。

この他、西条八十作詞、草川作曲による曲譜集『童謡 山の母』(大正11年) 西条八十作詞)、『草川信童謡全集』第1輯(昭和6)など、単独の作曲集も刊行されています。

草川と渋谷の地は、深い縁があります。

大正6年、東京音楽学校を卒業した草川は、渋谷町立長谷戸小学校で唱歌の教員となり、10年間在籍しています。また、大正7年からは、猿楽小学校の教員を兼務していました。

「夕焼小焼」は、長谷戸小学校在勤中に作曲されており、現在同校にはこの歌碑が建立されています。長野市生まれの草川は、信州の自然

や幼年時代に強い思い出があったようで、「夕焼小焼」の作曲に対しても「よく私は、少年の日を過した故郷にでも立ち帰ったやうな気持ちで曲を書くことがあります、この曲などが正にそれです」(『世界音楽全集』第11巻 春秋社)と書いています。

この他、草川は、大正7年、渋谷に創設された九頭竜繡画女学校で、音楽劇の指導を行っていました。同校は、同9年には目黒に移転しますが、刺繡科、繡画科、音楽科に分かれた専門学校でした。草川は、同12年に同校を辞めるまで、「珊瑚の宮」「スペインの秋」などの戯曲に、全曲オリジナルの作曲をし、オーケストラや発声を指導していたと言います。



(上) 長谷戸小学校に赴任した草川信
最後列 向かって左から2番目
(下) 九頭竜繡画学校の音楽劇

写真提供:草川誠氏

収蔵資料紹介

防毒マスク（隔離式）一式



今回ご紹介する資料は、太平洋戦争中、アメリカ軍が日本に対し、毒ガス攻撃することを想定し、日本で開発したマスクです。

この防毒マスクは昭和十二年に防空法が公布されるとともに開発・改良が進められ、翌十三年から各種の製品が発売されました。

防毒マスクは大きくわけて2種類あります。有毒物質を含んだ空気から有毒物質を吸着させる部分をマスクに直接付属させた直結式と、ゴム製の蛇腹につないだ隔離式です。戦時中の防毒マスクは、警防団・家庭用それぞれに、直結式と隔離式があり、子供用以外は、選択できました。

しかし、直結式の方が携帯しやすく、安価で、装着も容易だったために、女性や子どもなどが多く利用したようです。

隔離式はその性能が重視されたのか、警防団などで多く利用されたようです。

隔離式防毒マスクに入っている、「市民防毒面取扱並びに保存法」によると、使い方は、マスクを装着し、ゴム製の蛇腹の管を吸収缶とよばれる缶につなぎ、その缶をポーチ状の袋に入れ、肩からかけて使用します。

マスクを付け、呼吸すると、まず吸収缶の底の穴から空気が入り、缶内の吸着剤により、有毒物が吸収されます。次に、ゴム管を通り、マスク内に正常になった空気が届いて、呼吸ができるようになるのです。そして、吐いた息は口元の排気弁よりそのまま外に出ます。

ただ、この防毒マスクは防空訓練などでは使用されたものの、実際にはほとんど使われなかったようです。

【今後の展示予定】

特別展「『春の小川』の流れた街・渋谷

—川が映し出す地域史—

開催中 平成20年12月21日（日）まで

*渋谷区内の川の歴史についての展示。

特別展「本にえがかれた子どもたち

—町の子ども・村の子ども—

平成21年1月20日（火）～3月22日（日）

*大正期に出版された本や雑誌を中心に、そこにえがかれた子どもの姿を紹介する展示。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般：100円（80円）・小中学生：50円（40円）

※（ ）内は10名以上の団体料金
※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.9

平成20年12月1日発行